

1. 研究目的

現代社会を特徴づけるものは、社会に蔓延するストレスである。特に30代は常に仕事に対しプレッシャーを感じ、リラックスして自分の時間を過ごすことが出来ない。また、家に帰ると小さな子供の世話に追われて自分の時間をなかなか確保することが出来ず、それがストレスの原因になってしまっている人も多い。このような生活の中に、もっと落ち着ける場所・空間があれば気持ちがりセットされて、明日へ活力となるのではないかと考えた。本研究では、パーソナルスペースをもとに快適に時間を過ごせる空間の提案を行う。

2. 調査と分析

仕事をしている30代男女に対し、「どんなことをしている時に落ち着くか」というインタビューを行った。その結果、最も多かったのは“読書”、その次は“録画しておいたテレビの鑑賞”だった。また、家族がいる人の中には“トイレで新聞を読んでいる時”という声も聞くことが出来た。これらのインタビュー結果を踏まえ、総合的に考えると、その背景には「一人になって落ち着いて何かをしたい」という心理が働いていると推測できる。

「家の中で本当に一番落ち着けるのはトイレ」と聞くことがあるが、これは他人の目を気にしなくていいのはもちろんだが、ある程度のスペースというものが大きく関係していると考え。そこで、家族にも邪魔されずに自分のしたいことに集中出来る空間があれば、生活をより豊かで充実したものに変えることが出来ると考える。ある程度閉鎖された空間・自由な姿勢のとれる広さの2点に重点を置き、研究を進めることとした。

3. コンセプトの立案

「外部をシャットアウト」

- ・自分のやりたいことに集中できる。
- ・体全体を包み込んで、安心感を持てる。

4. デザイン展開

コンセプトを踏まえ、“体全体を包み込んで落ち着けるカタチ”・“自宅での使用を想定して家族とのコミュニケーションを取ることが可能”・“コンパクトになる機能”、これらを持たせることで、限られたスペースを最大限に活かすことが出来ると考え、プロトタイプングを繰り返し行い、問題点を洗い出しながらデザイン展開を行った。

まず一次モデルでは、様々な体勢を取るのに必要な広さがどのくらいなのか、違和感の無い視界

の遮断方法は何なのかを実寸で作製、第三者に中に入れてもらい、意見を聞きながら最適なサイズを探った。

しかし、一次モデルは非常に大きく、家に置くには困難なため、頭部に装着するタイプのモデルの制作も行った。これは体全体を包まずに視界を遮断出来れば同じ効果が得られるのではないかとという仮説により、出てきたアイデアである。

頭部装着タイプを実際に着けてみると、体勢によっては邪魔になってしまうという問題点が生じたため、原点に立ち返って体全体を包み込むタイプに戻ることとした。

最終モデルでは、もっとも重要な包み込む印象を与えるドーム部分に工業用フェルトを用いることで、硬い骨組みを使用せずに自立させ、さらにフェルトを押しつぶすことでソファーとしても使用出来るようにした。これにより、家族とコミュニケーションも取ることが可能になった。また、ユニット底面を八角形から円形へと変更することで、柔らかく包まれる形状となり、大きすぎる印象を軽減することにも成功した。収納性も考慮し、ユニット底面を3つのパーツに分け、折り畳んでしまえるようにした。

5. 完成図



6. 結論

調査の段階でインタビューを行った人に実際に中に入れて頂いた結果、“とても中に入ると落ち着く”や“集中してやりたいことが出来そう”などの意見を得られ、自分の時間を過ごす空間としての目標を達成できたのではないかと考えられる。しかし、“もう少し広い方が自由な体勢を取れる”といった意見もあり、この点については再考する必要があると考える。

文献

「ストレス社会」

<http://www.geocities.jp/kurusiminobara/rose1/sutorosu.html>